

巡礼女エゲリアの闇*

辻 成 史

要 旨

筆者が長年調査を行ってきたトルコ共和国ムーラ県フェティエ市のエリュデニズ地域には、十指に余る多数の4～6世紀頃の教会堂遺跡が存在するが、その中でゲミレル島上の第Ⅱ会堂には、半円形の祭室 *apsis* を取り巻くように円環をなす小トンネルが設けられている。その突き当たりには元来聖遺物を納めていたと思われる棚が設けられており、トンネル左右の壁面には多数の祈願のためのグラフィッティが刻み込まれている。本論はそのグラフィッティの解釈はまず措いて、この一種の地下墓所（クリュプタ）である小トンネルの持つ祭祀的機能がどのようなものであったかを考える。さらにその特異な構造から必然的となる闇の空間のもつ宗教的、心理学的な意味と機能を、古代・中世の文学的トポスとの関連で探してみたい。

キーワード：教会建築、典礼、巡礼、洞窟、闇、悲劇

1990年大阪大学文学部を中心として組織された美術史・考古学調査隊は、トルコ共和国ムーラ県フェティエ市の地中海沿岸、いわゆるエリュデニズ地域一帯に展開するビザンティン遺跡群の調査を開始した¹⁾。1995年以降、調査・発掘活動は愛知教育大学に引き継がれて多くの成果を生み、現在第二回の報告書の編纂が始まっている。今回は遺跡群の中心をなすゲミレル島に現在確認されている四つの会堂の中でも、第Ⅱ会堂の祭室背後に設けられたトンネル状周歩廊とその壁面に発見されたグラフィッティ群を見ることから論を始めたい（図1～3）。

すでに本学紀要第2号（2002）に発表した論文でも触れた所であるが、会堂内部の祭室正面向かって左に設けられた入口から幅およそ0.8m、高さ2mの周歩廊に入ると、周歩廊はアプスの外壁を取り巻くようにカーヴする。アプスの厚い外壁面はそのまま廊の

右壁となり、左壁は自然のベドロックを取り込んだ上に雑な切石を積んで造られている(図4~5)。天井は比較的小さな石材を用いた浅いヴォールトで覆われ、窓のようなものは設けられていない。トンネルは身廊側から見て入口と対称の祭室向かって右までは貫通しておらず、半円周のおよそ4分の3くらい入ったところで外部から張り出している大きなベドロックの斜面とぶつかって行き止まりとなる。突き当たりに露出している岩面には、高さ1メートル余の所にはほぼ三角形の不整形のプランをなす棚が切り込まれ、そこにはかつてこの会堂ととんならかの関係を持つ聖人の聖遺物が安置されていたと推測される。棚の開口部周辺の壁と天井には、その部分とトンネル通路の間を仕切っていた、おそらくは格子のようなものが嵌め込まれていた痕跡がある。²⁾

先の本学紀要論文にも触れたように、トンネルの左右の壁の漆喰面には多数のグラフィッティが刻まれており、中には物語場面と思われるもの、あるいは象徴的なクジャクを描いたものもあるが、大部分は船を表している。その一つで入口近くの左の壁上に刻まれた比較的大きなグラフィッティには、マストの船首寄りの傍らに立つ異貌の人物の4分の3半身像が見られる(図6、8)。このことからここに祀られた聖遺物が、航海者の守護聖人であった聖ニコラオスになんらかの関係があることが推測される。周歩廊壁面上に確認される十数個のグラフィッティの大半が船であることはこの推測を強化する。³⁾ 小アジアの地中海・黒海の沿岸には、ビザンティンからオスマン期にかけての船のグラフィッティが多数残存しているが、ゲミレル島におけるこのグラフィッティは、船の形状、さらには聖人と思われる人物の特異な面貌から、おそらく4世紀後半から遅くとも600年以前に描かれたものと推定される。とくに一本マストに張られた巨大といってもいい大型の方形の帆と船首の吃水線の辺りに突出した衡角状の部分は、400年前後の画像資料との比較にも耐える古代風のものである(図7)。⁴⁾ ここに見る船上に立つ守護聖人とおぼしい人物の表現は、おそらくは東地中海における聖ニコラオス崇敬を証する最初期の画像例であり、この点でこの発見には意義深いものがある。⁵⁾

* * * *

グラフィッティの一見してまことに稚拙、粗放な様式も、捉え方によっては会堂とその周辺の遺構の年代を考える上で重要な研究課題であるが、その議論は他の機会に譲り、今回は考察をむしろこのイメージの此方、すなわちこれらグラフィッティが刻まれている周歩廊という特異な空間に向けることとしたい。第一にはこの周歩廊空間の歴史的特異性はどこにあるか、第二にグラフィッティが刻まれた後にここを訪れた人々は、それをどのように見ていたのか、という二点に重点をおいて考えてみたい。とくにこの特殊な空間への観者の身体的関与ということを重視したい。

第一の問題に関連し聖人の崇敬に関係すると思われるグラフィッティがこのような場に刻まれたこと自体は、まったく議論の必要のない自明なことともいえよう。つまりこ

の周歩廊は聖人の聖遺物を祀ってあるという点で非常に特定化された空間であり、それゆえ聖人に対する祈願を籠め、加護を求めてここにこ刻んだに違いない。しかしこの解答が極めて便宜的なものであることは明らかである。一步踏み込んで、なぜにこのような特殊な形態の空間——途中で行き止まりとなっているトンネル形周歩廊——が必要とされたのかを考えるなら、答えはそれほど容易ではない。

初期ビザンティン・初期中世会堂建築のほとんどに、その会堂が記念する聖人に関する聖遺物を納める特殊な空間が設定されていることはよく知られている。しかしその形態、それと会堂本体——とくに身廊や祭室部——との構造的関連は必ずしも一様ではない。あるいは地下の小礼拝堂、いわゆるクリュプタを祭室の直下に設ける、あるいは祭室を取り巻く周歩廊を設けてその中に祭壇を置く。⁶⁾ 当然ながらこのようなクリュプタは形態と機能の両面で古代末期～初期キリスト教時代の墓所のそれを継承している。最初期の著名な例を引くなら、コンスタンティヌス大帝によって建造された最初のキリスト教大バシリカである聖ピエトロ大聖堂は、それ以前から存在していた聖ペテロの墓所の上に祭室が築かれ、やがて教皇大グレゴリウス（在位594-604）によってそこに特異な環状クリュプタ Ringcrypta が設けられた。⁷⁾ このように祭室直下に設けられたクリュプタと墓所との関連は、その後東・西の地中海世界の多くの中世会堂に引き継がれて今日に伝わっている。しかしこのゲミレル島第二会堂に見るような周歩廊形式の場合、5世紀以前に遡るプロトタイプな例との関連はそれほど直線的でもなく、理解しやすいものでもない。

コンスタンティヌス大帝の造営のうちで周歩廊の存在が明瞭なのは、イエルサレムの聖墳墓会堂に見られるいわゆる「アナスタシス」の記念堂であろう。シャルル・クアスノンによる戦後の調査、その他近年の研究に基づいていうなら、キリストの墳墓とされるグロット spelunca は、聖墳墓会堂に接する直径およそ35メートルの円堂——古代末期の呼称に従えば「アナスタシス」——の中心に置かれていた⁸⁾（図9）。円堂外壁には、周歩廊に向かって三ヶ所に小さな祭室が開かれていた。グロットは円環状の柱列に取り巻かれ、聖墳墓が彫り込まれた岩自体は、さらに小柱列がこれを取り巻いていた。小柱列の上には円錐型の屋根を持った天蓋が架せられ、正面はこれと一体になって神殿風の破風を戴くエディキュラを形成していた。小柱列の正面の柱間にはおそらく青銅製の格子扉が嵌められており、グロットの内部を格子の手前と奥の二つの空間に分けていた。図10は一昨年本学紀要で発表した論中でも引用した現ヴァチカン美術館蔵の木製小箱（6世紀）蓋裏面に描かれた図像の一部である。箱にはイエルサレムに詣でた巡礼が持ち帰ったと思われる聖地で採取した泥と石片が納められており、図像はその頃聖地で見られたキリストの生涯の事績にちなんだ各種の建造物が描かれている。本図はキリストの墓に詣でる聖女達とそれを迎える天使を表しているが、そこに描かれた聖墳墓は明ら

かに当時のアナスタシスの実情を模している。4世紀の巡礼女エゲリアの記すところでは、司教のみがこの格子扉の奥に入れたようで、おそらく一般の信者は格子越しに聖墳墓を覗き見たようである。6世紀頃から今日に伝わる画像や中世の巡礼の記述を勘案するなら、グロット最奥部に置かれた聖墳墓そのものは、正面がアーチ状を成し、その前面に供儀のための小祭壇あるいはメンサが設けられていた⁹⁾。

通説によれば本来この聖墳墓は「ユダヤ人の習慣として」一個の大きな岩に彫り込まれていた多数の墳墓群の一つであったが、コンスタンティヌス大帝の造営の際他の墓は削り取り、いわゆる聖墳墓のみを円錐状に残したことになっている。露出した大きな自然のベッドロックに複数の墓を掘り込むことが何故ユダヤ人の習慣とされたかは知らないが、これは東地中海世界、とくに小アジア沿岸地域にはごく普通に見られる古代末期墳墓の形式であり、エリュデニズ地域でもこの種の墳墓群が数多く観察される。

以上のようなアナスタシスの円堂とその中心に置かれた聖墳墓のグロットの形状を総合して考えるなら、まず明らかなのは、アナスタシスの円堂外壁と内部の大柱列によって形成されていた周歩廊は、単に大規模であったばかりでなく、また極めて開放的な空間であったことである。また周歩廊に向かって複数の小祭室が開かれている例も、よく知られたローマ市のいわゆる聖コスタンツァの廟堂をはじめ、多数挙げることができる。また諸説によれば、アナスタシスの円堂の中心は吹き放しの空間であったとも、あるいは円蓋に覆われ、それを支えるタンブールに採光窓が設けられていたともいわれる。これ以後地中海世界に数えきれぬ程建造された円堂形式の記念堂は、その多くがこのような周歩廊を備えていたであろう。そのまた多くは多数の巡礼が隊を成して入場し、その中心に置かれた聖遺物を拝見したり、あるいはこのアナスタシス円堂のように墓所の内部を窺うことを想定して造られており、周歩廊はそのような目的にまことにうってつけの空間であった。

そこで起る疑問は、振り返って、何故このゲミレル島における周歩廊がかくも暗い空間として形成されたか、ということである。入り口から最奥部まではそれほどたいした距離ではない。しかし、入り口開口部の周囲がほとんど崩壊し、加えて天井ヴォールトの石材が一部落下して天窓のような効果を果たしている現況においても、なおその最奥部は昼間でも相当に暗い。壁面上のグラフィッティはもちろん、聖遺物を納めたと思われる棚の周辺は懐中電灯を用いなければ細部を観察することが出来ない。

まったく採光のための開口部を持たないトンネル形の周歩廊で初期ビザンティン時代から今に残る例はそう多くはない。ユスティニアヌスの創建にかかるコンスタンティノポリスのアギア・イレーネの、シンスロノンの外壁にそってその基底部に穿たれたトンネル形周歩廊は、今日簡単に観察できる例の一つである。しかしこれがいつの時代のものであるか、また本来どのような機能を果たしていたものかについては、まだ十分資料

を涉猟していないし、正確にはゲミレル島における周歩廊とは、会堂本体との関係や構造を異にしている。¹⁰⁾

このような一般的状況に反して、ゲミレル島においては第Ⅱ会堂の他にも第Ⅰと第Ⅲ会堂には、アプス外壁東側に周歩廊というよりはむしろ小礼拝所というべきヴォールトで覆われた空間が設けられ、しかも参拝者は身廊の軸部を横切ることなく、側廊からここに入场できるようになっている¹¹⁾ (図11~12)。興味深いのはここでも採光のための開口部のあった明らかな形跡の認められないことである。これらの空間に入る参拝者は、少なくともランプを手にした先導者に導かれなければ昼間でも足下が危うく、聖遺物を実見することも出来なかったであろう。あるいはまたこのような至聖所は、以下に論じるベツレヘムの聖降誕会堂のグロットがそうであったように、常夜灯のようなランプによってその中核部分のみが照らされていたであろう。それにしても、ゲミレル島第Ⅱ会堂の周歩廊が、その円環上の形態においては多数の巡礼者を導くための初期円堂式記念堂の周歩廊に類似しているにもかかわらず、それが明るい外部からはいっさい閉ざされた、いわば闇の空間として造られたのは何故であろうか。

1991年のボンの学会でベアト・ブレンクは、初期キリスト教時代の至聖所について、誰がどのようにして聖遺物に近付き得たかを詳細に論じた。彼はこのように周歩廊と地下墓所の機能を併せ持った空間を環状クリュプタと呼んで詳しく論じたが、彼の説によれば地中海世界におけるそのもっとも早い例は、教皇大グレゴリウスによって改造されたローマの聖ピエトロの地下の至聖所であり、その影響はローマ市を中心に見られるとした。¹²⁾ ブレンクはこれをグレゴリオスの独自の発想に基づくとしている。ゲミレル島においてひとつひとつの周歩廊の年代が決定されていない今、断定的な議論は出来ないが、果たして教皇グレゴリオスの時代以前、すなわち6世紀末~7世紀初頭以前に環状地下墓所は存在しなかったであろうか。むしろ本来のパレスティナの聖地における体験から、環状地下墓所はまず東地中海において形成されたという仮説は許されないであろうか。ここではとりあえず、周歩廊およびその中核を成す至聖所としての墓窟を備えた「アナスタシス」円堂に注目し、環状地下の墓所は両者の機能を兼ねて造られたのではないかという推測に立って推論を進める。

その理由として第一に、第Ⅱ会堂自体がゲミレル島におけるおそらくもっとも古く大規模なネクロポリスとの関連において建てられていること、第二に、この周歩廊はその然るべきところに出口を持たず行き止まりになっているが、そこを遮っている巨大なベッドロックの斜面は、会堂の建設以前からなんらかの墓窟がそこに穿たれていた可能性が高い。なぜなら、今も会堂周辺の断崖や岩の斜面には、岩塊や岩壁に穿たれた多数の墳墓が見られ、先に「棚」と記述した周歩廊突き当たりの凹所に、会堂建設以前になんらかの形の墳墓が存在していた可能性は否定できない。ちなみに会堂周辺からは4世

紀後半から5世紀初頭にかけての貨幣二枚が発見されており、このネクロポリスの起源は、遅くとも4世紀後半に遡るとされる。¹³⁾

ここで考察を一步進め、このような闇の至聖所は、その起源において必ずしも墓所に限られたものでなかったことに注目したい。そのもっともよい例は、聖墳墓教会の「アナスタシス」と並んで、コンスタンティヌス大帝によって建設され、今日まで信者の崇敬的となっているベツレヘムの聖降誕教会内のキリスト降誕のグロットである。¹⁴⁾ この至聖所も、ヴァンサンとアベルの研究以来今日まで頻繁に論じられており、それらの成果と多くの画像資料をもとに初期キリスト教・初期ビザンティン時代の構造を容易に再建することができる。クラウトハイマーの記述によるなら、コンスタンティヌス大帝は巨大なバシリカの東に接して八角堂を置いた(図13)。八角堂の床はバシリカの床面より階段七段だけ高く、身廊・側廊とはアーチで連結されていた。八角堂の中心には円形の開口部が在り、床から三段上がったところにその開口部を巡る手摺がつけられていた。さらに六世紀になると、八角堂は東と南北にアプスが突出した、三葉形をなす集中式プランの空間に置き換えられた。

グロット自体は左右両側面に開口部を備え、そこから階段を通過してグロット内部に降り立つことができた。グロット内部の東正面軸上には降誕の洞窟、その南脇には幼児キリストが寝かされた飼い葉桶(クリッペ)の聖遺物、さらに北脇にはヘロデの軍勢によって虐殺されたベツレヘムの無垢の嬰兒のための墓所が見られた(図14)。12世紀に作られたコプト語写本 Paris, Bibl. Nat. Copte 13の挿絵は岩穴の中での降誕の場面を表しているが、グロット左右の開口部と、その一つを通して内部の様子を窺う羊飼い達が描かれている(図15)。先にも述べたようにベツレヘムの降誕教会の聖所としてのグロットも、とくに6世紀以降その内部はほとんど開口部を持たぬ闇の空間であったろう。訪なう巡礼者のために要所が上から釣り下げられた常夜灯のようなランプで照らされている様子は、今日に伝わる画像・工芸品の類いから想像することができる。¹⁵⁾

4世紀後半、はるばるスペインの地からパレスティナの聖地を訪れ、そこを拠点に三年に亘って東地中海奥地の聖地を訪ね歩いた巡礼女エゲリアの日記は、古代末期における巡礼活動や聖地における典礼などを知る上で極めて重要な資料として早くから多くの研究が成されている。その巡礼活動のクライマックスの一つは受難週から復活祭、さらに復活祭後に至る諸々の祭儀への参加である。この期間の聖地における典礼の主たるものは、昼間よりはむしろ夜間に執り行われた。とくにエゲリアのようにこの聖地で復活祭を祝うため遠隔の地からはるばる旅してきた巡礼者達は、棕櫚の日曜日以降ほとんど連日、夜明け前の闇の時刻、ときには夜半から黎明に至るほぼ徹夜の典礼、ヴィジルに参加している。いうまでもなく、福音書中の受難物語そのものが、ゲッセマネでの祈りをはじめとしてしばしば夜の出来事を扱っているということがこの根拠にある。さらに

このようなヴィジルが服喪の儀礼の一部であったことに疑いを挟む余地はない。我が国の仏教信仰における通夜の儀礼のように、徹宵して死者を悼む習慣は人類の文化の多くに見られる。

しかしながら、キリスト教の場合、とくに復活祭のヴィジルを、単純に死者の追悼のみに関連させるわけには行かない。何故ならそれは単に死を悼むばかりでなく、またその復活を待ち望む再生の祭儀でもあるからである。聖地のグロットの闇の空間は、単に死と関連させられたばかりでなく、キリストの誕生、さらには新しい生命に向かったの復活を祝う重要なインスタレーションでもあった。巡礼女エゲリアの闇は、肉体をまとった神の死のみならず、また神の受肉としての生誕とも深く関わっている。初期キリスト教にあって、こうした深夜の闇あるいは至聖所の闇に課せられた両義性がもっとも端的に窺えるのは、あのイエルサレムのキュリルスの詳細な洗礼志願者のための説教であろう。聖地で復活祭の黎明に執り行われた洗礼の儀式こそ、死と再生の両者に関わる闇の儀礼であった。¹⁶⁾

* * * *

このような闇の中での死と再生の儀礼が、キリスト教以前の古代地中海世界における諸宗教、とりわけ各種の秘儀宗教に重要な先例を持っていることは、20世紀初頭以来多くの研究が示してきた。それにつけても、古代文学の領域においても、闇に帰せられたこのような両義性が、悲劇の恋人達という特異な文学的トポスを形成したことは興味深い。それによれば闇の墓所は、この世で結ばれなかった恋人達が死によって結ばれる悲劇的愛の場でもあった。ソフォクレスの『アンティゴネー』は古代におけるその原形のひとつであろう。¹⁷⁾ 叔父クレオン王の命にそむいて兄弟の亡骸を手厚く葬ろうとした亡きエディッポス王の娘アンティゴネーは、罰として市外の淋しいところ (ἐρημος) に在った岩に穿たれた墓に幽閉され、僅かの食物をあてがわれて死を待つように命じられる。ソフォクレスはその墓の形状についても悲劇のそこかしこで言及しており、それらを総合するなら、それはおそらく自然の岩盤に穿たれた洞窟であり、入口はごく狭い岩の裂け目であった。そこから内部を窺がったり踏み入ったりすることも出来たようである。¹⁸⁾

一方アンティゴネーは、すでにクレオン王の息子ハエモンと婚約しており、その婚礼も間近であった。幽閉による死を宣告されたアンティゴネーが、その引かれてゆく場所を「ああ、墓よ、そこが花嫁の居間で、いつも見張りのついた掘り抜きの牢屋なのだ」(ὦ τύμβος, ὦ νυμφεῖον, ὦ κατασκαφῆς οἴκησις αἰείφουρος..., 890-891) と叫び、コロスはゼウスの胤を宿したダナエの例を引いて、「ダナエの姿さえ、輝く空の光に訣れ、…墓に等しい花嫁の部屋に閉じ込められて隠れていたのだ」(κρυπτομένα δὲν τυμβήρει θαλάμῳ κατεζεύχθη, 948) (傍点筆者) と歌うのはこのためである。アンティゴネーの死の墓は同時に花嫁の部屋であった。中世キリスト教の時代になるとこの θαλάμος は、

聖母がそこで受胎を告知される彼女の居間を指すようになることも思い出しておきたい。

やがて許嫁の幽閉を知ったハエモンは、父王と激しく口論し、怒って宮殿を走り出て許嫁の閉じ込められている墓に向かう。ソフォクレスはそれがいつどうして起こったかについては語らないが、ハエモンがそこで見たものは、すでに縊死を遂げたアンティゴネーの亡骸であった。錯乱したハエモンは、駆けつけた父王に剣を抜いて切りつけようとするが果たせず、その刃を自分の脇腹に突き立て、アンティゴネーの骸にとりすがり、自らの血潮を浴びて死ぬ。

ソフォクレスのこの悲劇の恋人たちというトポスは、おそらくすでに古代口承文学の中で形成されていたであろうし、またそれ自体が原形となって多くの類似の物語を生んだと思われる。そのうちの今に伝わる例であり、古代・中世に多くの画像を生んだのはオヴィディウスの『変容譚』中に語られている「ピラムスとテイスベ」の悲劇であろう。さらにこの伝統は、マッテオ・バンデッロのような盛期ルネッサンス・イタリアの文学者に引き継がれ、ついにはシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を生むに至った。¹⁹⁾

イタリア・ルネッサンス文学とシェイクスピアの関係を除いて、これらの作品間の直接の影響関係を十分に証明することは出来ないが、そこには明らかにいくつかの共通した要素が認められる。第一に『アンティゴネー』、『ピラムスとテイスベ』、『ロミオとジュリエット』に共通しているのは、悲劇の主人公達がそれぞれの生家ばかりでなく、住み慣れた町からも離れたところへ赴く羽目になることである。上述のようにアンティゴネーの幽閉される墓は「荒野 (ἐρημος)」にあったし、ピラムスとテイスベは夜の静寂の訪れるとともに家を出、町の郊外の本の桑の木蔭で待ち合わせる。²⁰⁾ 『ロミオとジュリエット』に関しては、彼等が最後を遂げる墓所が市街地に対してどういう位置にあったかは具体的には語られていない。しかし一説によればシェイクスピアは『真夏の夜の夢』の上演に際し幕間狂言として「ピラムスとテイスベ」のパロディーを演じたとされており、²¹⁾ ジュリエットの墓の在り処は暗黙にヴェローナ市の市中ではなく郊外とされていたことであろう。

さらに三つの悲劇のいずれにおいても、恋人達の赴くところはいずれも闇、あるいは陰 (umbra) の支配する場である。アンティゴネーの幽閉される墓所は岩に掘り込まれた洞窟である。ピラムスとテイスベが待ち合わせを約束し、遂には死を遂げる場所は伝説上のペルシャ王ニノスの墓の傍らの高い桑の樹の陰 (umbra) である。またそれ以前にテイスベはライオンの出現に恐れて洞窟に逃げ込み、そこに上着を残したのが悲劇のもととなる。しかし本論の主旨に立ち帰って考えるなら、この陰 (umbra) が、本来であれば恋人達が最終的に結ばれ愛の成就するはずの場所であったことは重要である。そうであれば、この umbra 自体は必然的に死のみを意味するものではなからう。

恋する女性がやがてまた剣で自らを貫ぬくことになるあのアエネーアスとデイドーの

悲話（『アエネーイス』Ⅳ）にしても、彼等が初めて結ばれたのは狩の折りに突然の嵐を逃れて入った洞窟の中であった。その嵐と洞窟（spelunca）は大地母神テルスでもあるユーノーが設けた愛の闇であり、ウェーヌスが秘かに企んだ彼女の死は、神々にすら予測されていなかった。²²⁾ これら悲劇の恋人達の出会いと死の場となった洞窟は、今また姿を変えてキリストの降誕と葬りの場ともなった。人が生命としてこの世に現れ出、また死をもってこの世に別れを告げる、その往還の場であり、闇こそはこの往還の本質的属性であった。

* * * *

古代末期のキリスト教における闇の多義性を、古代以来の文芸の伝統の中に探ってきたが、ここでもう一度ゲミレル島、あるいはパレスティナの聖地の至聖所の空間に立ち帰り、その中での視覚体験がどのようなものであったかを考えてみよう。先に触れたように、元来これら至聖所の大部分は採光窓を持たず、ランプや蠟燭による照明がなければまったくの闇であった。ようやく中世になって、聖墳墓教会において一部の巡礼が聖墳墓にランプを献じることが出来るようになった。しかし初期キリスト教から初期ビザンティン時代にかけての至聖所の内部は一般人にはまったくの闇であり、司教とか特別の地位あるもの、あるいは職業化した番人だけが内部に入り、照明の下で聖遺物を実見し得たと推定されている。²³⁾

ほとんど照明を欠いた至聖所の闇は、訪れる人にどのような心理的、また知覚上の影響をおよぼすであろうか。今日の精神病理学が一般に説くところによれば、視覚的刺激がほとんど消失した状態は一種の感覚遮断の症状を引き起こす。その状態が長く続くと、しだいに意識野が狭まって来るが、そこで特定の刺激を与えたり、あるいは特定の対象に注意を集中させると、一時的な譫妄状態に陥る。それは事実上催眠に陥った状態に近く、その状態で何かを語りかけられたり見せられたりすると、言語や表象＝イメージを通じて伝えられている内容と現実との区別がつき難くなってくる。²⁴⁾

報告者自身も、かつてテサロニキのオシオス・ダヴィドの教会で、宵闇の迫る聖金曜日のヴィジルの際、多くの、とくに女性の信者が、司祭の背に背負われて埋葬場に向かう（と想定された）キリストのイコンに対し、涙を流しながら香油を振り掛けるのを目撃したことがある。これを催眠状態と呼ぶのは相応しくないかも知れないが、長時間に亘る交誦歌、詩編の朗唱、香の煙り、そして深まる夜の闇と同時進行する受難物語の典礼的演出に、感じやすい信者があたかも実際にキリストの受難の場面に居合わせているような心理になったことは容易に想像される。ところでまったく同じような現象がエゲリアによって記述されているのはまことに興味深い。²⁵⁾ 聖金曜日の朝まだき、闇の中に最初の鶏鳴を聞く頃、大勢の巡礼達は200本以上の蠟燭の光を頼りにゲッセマネの園に下り、そこで司祭がキリスト逮捕の福音書箇所を朗読した。すると巡礼達の間から次第

に嘆きの声が高まり、ついには全群集が大声で泣き出し、その声はイェルサレムの市街地にまで聞こえたという。それ以外の何ヶ所かにおいても、受難節の各時点で、悲しみに嘆き、泣く信者の様子が触れられている。このような一種の感情移入ともいべき現象が起るについては、そこに受難節の闇が重要な背景を成していると考えらるべきであろう。

再び精神病理学者のいうところに帰るなら、この現実と表象＝イメージの混同は、イメージが与えられた、その特定の時、特定の場でだけ起るものではない。一例として、夜間周囲が薄暗くなると共に一部の老人に起る興味深い症状がある。老人は昼間光のあるうちは普通に暮らしているのだが、宵闇の迫ると共に意識の統覚力が弱まり、次第に過去の記憶つまり自分自身の内部にある表象と現実の区別がつかなくなり、その記憶に左右された奇妙な言動を始める。例えば、もうとうの昔に辞めた職場に行くのだと主張する。あるいは、かつて大洪水を経験した患者は、夜になると洪水が来るといって押し入れに隠れたりする。この場合は外からその時与えられた表象ではなく、自らの内に蓄えられた記憶の表象が現実と等価のものに転化するのである。

ところで、H. ベルティンクはその近著『イメージの人間学。イメージ学の企て』の序章「イメージと身体の間としてのメディア：主題への導入」の中で、メディアを我々の身体の属するこちら側と、様々な表象—観念の属するあちら側の境に立つものとし、三者の関係を巧みに分析してみせてくれた。²⁶⁾ 問題とされるのは外的・物質的イメージばかりではなく、内的・心的イメージの生産である。ベルティンクのいうメディアは、彼方の「ここにはない」ものの諸々のイメージ——想像された場面、遠い記憶、観念等々——が、現実の「ここにある」イメージと同等の互換性をもって力を振るう場でもある。あのスウェーデンの聖女ブリギッタは、降誕の場面を目撃するためにわざわざベツレヘムの地まで旅し、降誕のグロットの闇の中に座して、はじめて聖母がキリストを出産する経過をつぶさに見ることが出来た。ここにメディアとそれが享受される場 (locus) の重要な関係が潜んでいる。²⁷⁾

現代のメディアの場としての闇の問題の論究は、未だ始まったばかりである。しかし我々はどうやら、あのゲミレル島のトンネルに刻まれたグラフィッティが訪れる人にどう見えたかという疑問に対する答えの端緒をつかみかかっているようである。近代の美術史的視点からするなら、あのグラフィッティは余りにも素朴、粗放な作品に過ぎない。しかし暗闇の中、小さなランプを掲げてそれを描き、また揺れ動く灯火の下でそれを見た古代末期の船乗り達には、それは実に活ける身体を備えたイメージと映ったに違いない。聖遺物の置かれたその闇は、また物語の中に去ったはずの聖ニコラオスの姿を、活けるもの、彼等と同じ身体を備えたもの、それでいて生と死の往還に立って彼等を守るものとして目の当たりにしうる、聖なる奇跡の場でもあった。

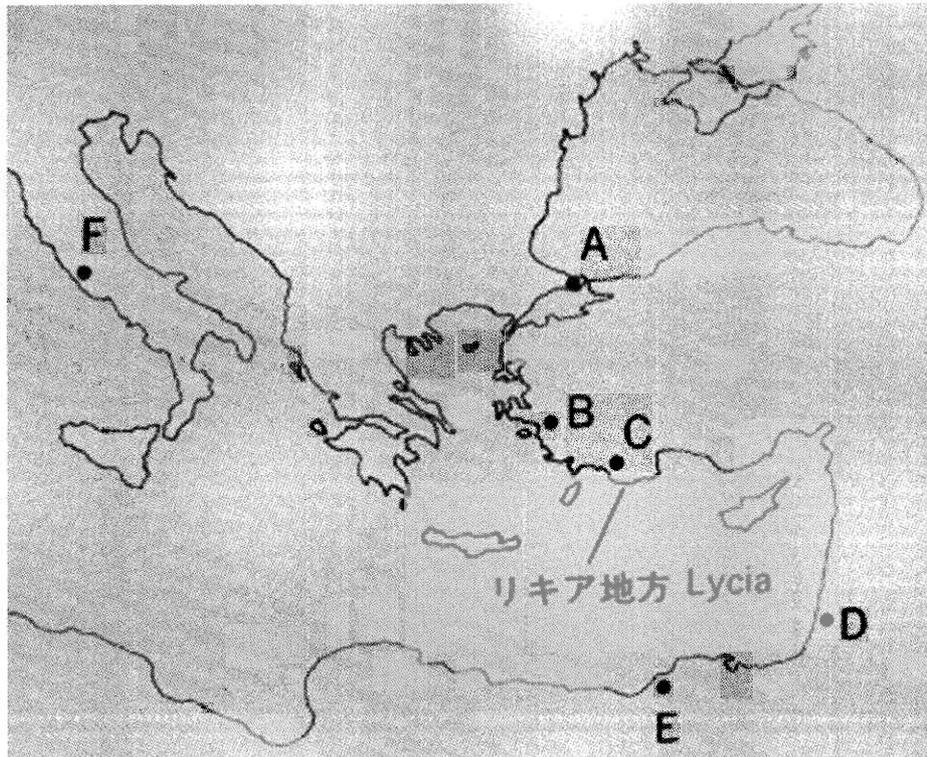
注

*本稿は最初2001年3月立命館大学でH. ベルティンク教授を招いて行われたシンポジウム「身体、メディアそしてイメージ」、およびそれに続いて同年5月に神戸大学で行われた第45回美術史学会全国大会における口頭発表原稿に、最近になって加筆、訂正を行ったものである。原文が口頭発表原稿であったため、十分に論理的整合性を備えた報告というよりは、研究テーマの将来に向けての大掴みな展望という形になっている。しかし、本稿はこの口頭発表以後に刊行された古代末期における「闇」の表象をめぐる以下の二編の拙論の前提をなすという意味で、あえてそのまま掲載させていただくこととした。

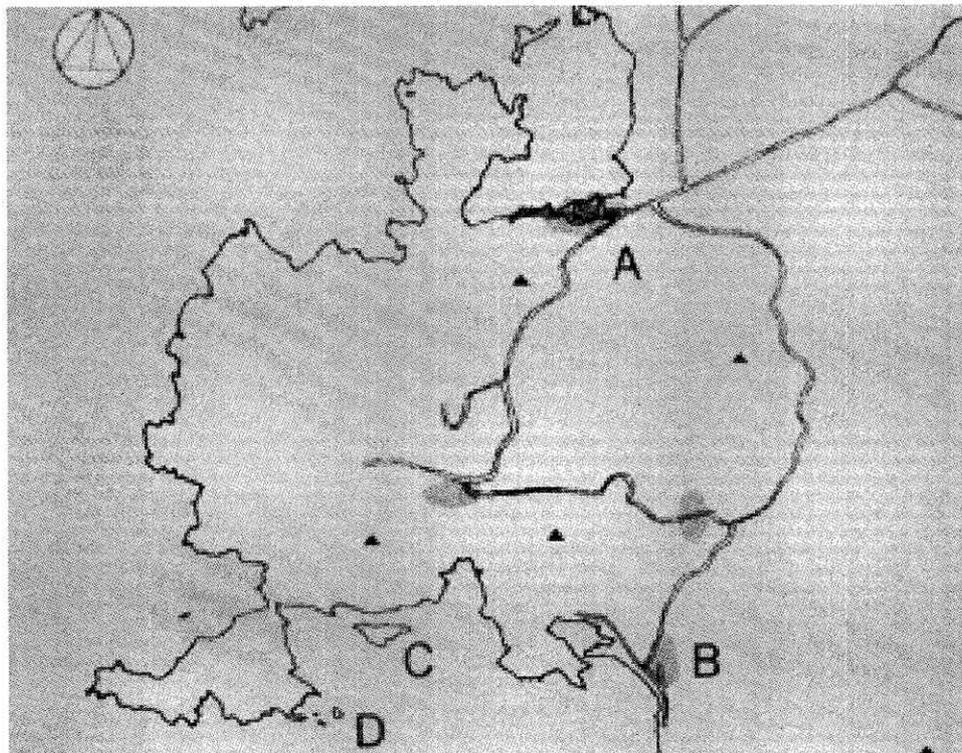
- 1) “Notes from the Field in Ölüdeniz, Muğla, T. C.” (with an Excursion by M. Yoshimatsu, 『大手前大学人文科学部論集』2, 2002, pp. 1-26.
 - 2) “Aeneas in the Darkness—Observations on the Miniatures of the Vatican Virgil—” 『古代末期の写本画 古典古代からの伝統と中世への遺産』(=平成11年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書(研究代表者 越宏一)), 2003, pp. 109-115.
- 1) Tsuji (ed.), *The Survey of Early Byzantine Sites in Ölüdeniz Area (Lycia, Turkey): The First Preliminary Report*. (『大阪大学文学部紀要』35号, 1995)
 - 2) T. Masuda, “Church II on Gemiler Ada,” in Tsuji (ed.), *First Preliminary Report*, p. 64.
 - 3) Tsuji, 『大手前大学人文科学部論集』2, 2002, pp. 11-14.
 - 4) J. H. Pryor, *Geography, Technology, and War. Studies in the Maritime History of the Mediterranean, 649-1571*, Cambridge, U. K., 1988. ここでの引用は1992年のペーパーバック版から。古代～古代末期の帆船における方形の帆の使用、その他の特徴についてはより最近の次の書に詳しい。J. H. Pryor-E. M. Jeffreys, *The Age of the ΔΡΟΜΩΝ. The Byzantine Navy ca 500-1204*, (Leiden-Boston, 2006), esp. pp. 123-161.
 - 5) I. Malkoç-Sh. Tsuji, “Preliminary Report on the Excavations in Ölüdeniz, Lycia, by Fethiye Museum, the Ministry of Culture, Turkey, during 1999-2004”, *Al-Rafidan*, XXVI, 2005, pp. 1-24. esp. pp. 12-14, figs. 20a-c. このグラフィッティは、今年イタリアのバリ市で開かれる聖ニコラオスをめぐる大展示会カタログ中で、フィレンツェ大学のバッチ教授によってあらためて紹介されることとなっている。
 - 6) G. Matthiae, “Cripta,” *Enciclopedia dell’arte antica*, Vol. 2., 1959, p. 936.
 - 7) S. Pietro in Vaticano における環状クリュプタについては B. Brenk, “Der Kultort, seine Zugänglichkeit und seine Besucher”, *Akten des XII. Internationalen Kongresses für Christliche Archäologie*, Bonn, 22.-28. September 1991, Part 1 (Münster, 1995), pp. 76-81. それに続く西方の環状クリュプタについては加藤磨殊枝 『ローマのサン・クリソゴノ聖堂壁画』(= *Aspects of Problems in Western Art History*, 2) (東京, 2001) p. 79注13他。
 - 8) R. Krautheimer, *Early Christian and Byzantine Architecture*, Penguin Book, 1986⁴, pp. 60-63, et pass. ; Ch. Couasnon, *The Church of the Holy Sepulchre in Jerusalem*, Oxford, 1974.
 - 9) Egeria, *Itinerarium*, 24, 1-7 (= *Fontes Christiani*, 20. 訳注G. Rowekamp.) Freiburg, 1995, pp. 78-81および225-231. Cf. P. Maraval, *Lieux saints et pèlerinages d’Orient*, 2^e éd., Paris, 2004, pp. 252-257.
 - 10) Masuda, *op. cit.*, pp. 63-64. 上出注2)。
 - 11) *Idem*, “Church I on Gemiler Ada,” in Tsuji (ed.), *First Preliminary Report*, pp. 57ff et passim.
 - 12) Brenk, *op. cit.* 上記注7)。

- 13) 第Ⅱ会堂周辺区域で発見された古代末期貨幣については拙論「エリュデニズ（トルコ共和国ムーラ県フェティエ市）の古代末期・初期ビザンティン遺構と装飾の編年(1) —その一—」『第13回ヘレニズム・イスラム考古学会報告書』（印刷中）を参照。
- 14) Krautheimer, *op. cit.*, pp. 59-60; Brenk, *op. cit.*, pp. 90-94.
- 15) K. Weitzmann, "Loca Sancta and the Representational Arts of Palestine," *Dumbarton Oaks Papers*, 28, 1974, pp. 31-55.
- 16) Egeria, *op. cit.*, p. 97, esp. notes. pp. 350-354.
- 17) ソポクレス『アンティゴネ』（呉茂一訳）、『世界古典文学全集 8』（筑摩書房、東京、1964）pp. 227-254。
- 18) 上出の呉訳によれば、774行のクレオンの言葉は「岩屋の中に掘りあけた空洞へと閉じこめるのだ」となっているが、同じくクレオンの言葉の886行は「円天井の墓穴へ閉じこめたうえ…」となっている。これは原文の "καὶ κατηρεφί τύμβῳ περιτύξαντες" をこう解したため思われる。
- 19) この問題の文学史的関連については下記を参考にした。G. Bullough (ed.), *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. I, London-New York, 1964, pp. 268ff. なお下記注21)を参照。
- 20) postera nocturnos Aurora removerat ignes, (82) solque pruinosas radiis siccaverat herbas: (83) ad solitum coiere locum. tum murmure parvo (84) multa prius questi statuunt, ut nocte silenti (85) fallere custodes foribusque excedere temptent, (86) cumque domo exierint, urbis quoque tecta relinquunt, (87) neve sit errandum lato spatiantibus arvo, (88) convenient ad busta Nini lateantque sub umbra (89) arboris: arbor ibi niveis uberrima pomis, (90) ardua morus, erat, gelido contermina fonti. (91) pacta placent; et lux, tarde discedere visa, (92) praecipitatur aquis, et aquis nox exit ab isdem. (*Met.* IV)
(<http://etext.lib.virginia.edu/toc/modeng/public/OviLMet.html>)
- 21) G. Bullough (ed.), *op. cit.*, pp. 373-376. 上出注19)。
- 22) speluncam Dido dux et Troianus eandem deveniunt. prima et Tellus et pronuba Iuno dant signum; fulsere ignes et conscius aether conubiis summoque ulularunt vertice Nymphae. ille dies primus leti primusque malorum causa fuit; neque enim specie famave movetur nec iam furtivum Dido meditatur amorem: coniugium vocat, hoc praetexit nomine culpam. (*Aen.* IV, 165-173)
(http://www.fh-augsburg.de/~harsch/Chronologia/Lsante01/Vergilius/ver_ae04.html)
- 23) ロシアから来た修道士ダニエルはボードウィン王に願い出て、はじめて聖墳墓にランプを献じることが出来た。Brenk, *op. cit.*, pp. 101-102.
- 24) 「闇」のもたらす精神病理学的症状については常盤台病院院長清水信氏にいろいろ御教示いただいた。記して謝する。
- 25) Egeria, *op. cit.*, 36, 3, pp. 269-270.
- 26) Belting, *Bild-Anthropologie. Entwürfe für eine Bildwissenschaft*, München, 2001.
- 27) 原始の洞窟壁画と「闇」のもたらすトランス状態の関係は本論の主旨と深く関わっているように思える。Jean Clottes et David Lewis-Williams. *Les chamanes de la préhistoire : transe et magie dans les grottes ornées*, Paris, 1996, esp. pp. 11ff.

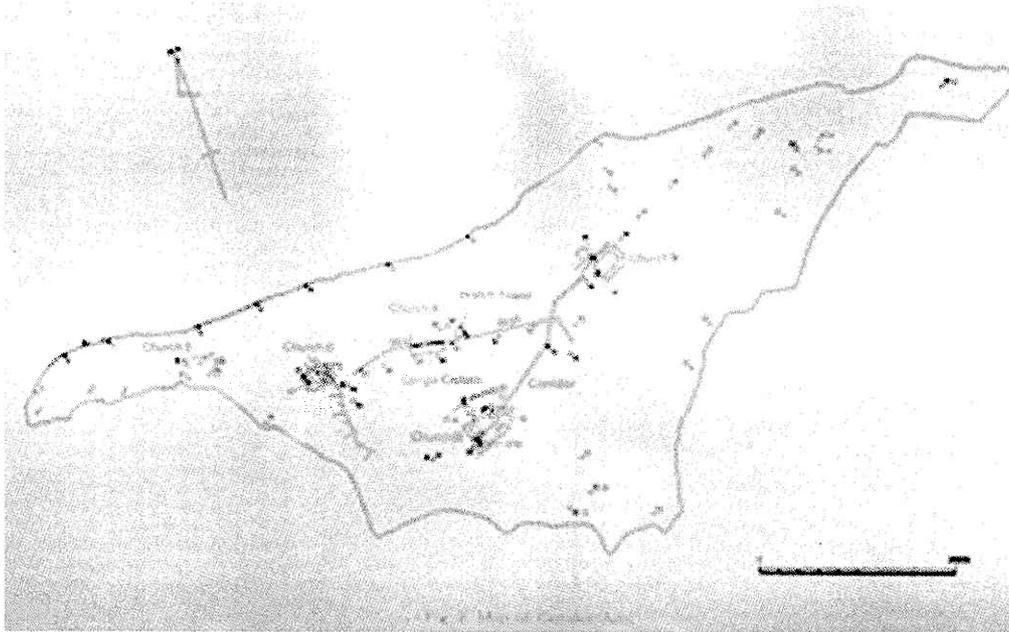
巡礼女エゲリアの闇



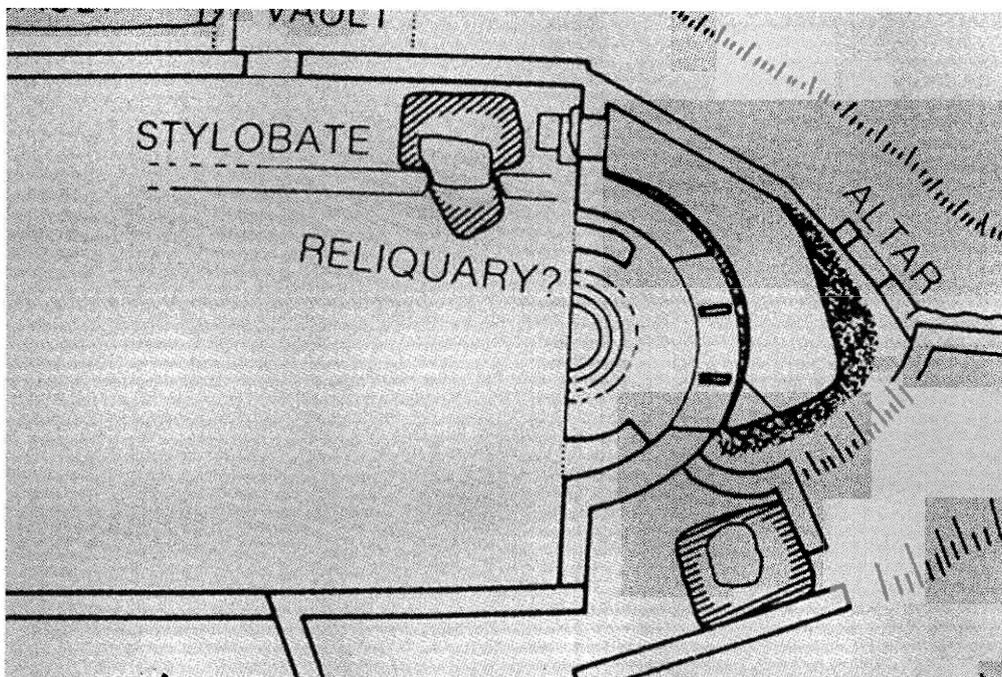
1. A: イスタンブール C. フェティエ市



2. A. フェティエ市 C. ゲミレル島



3. ゲミレル島

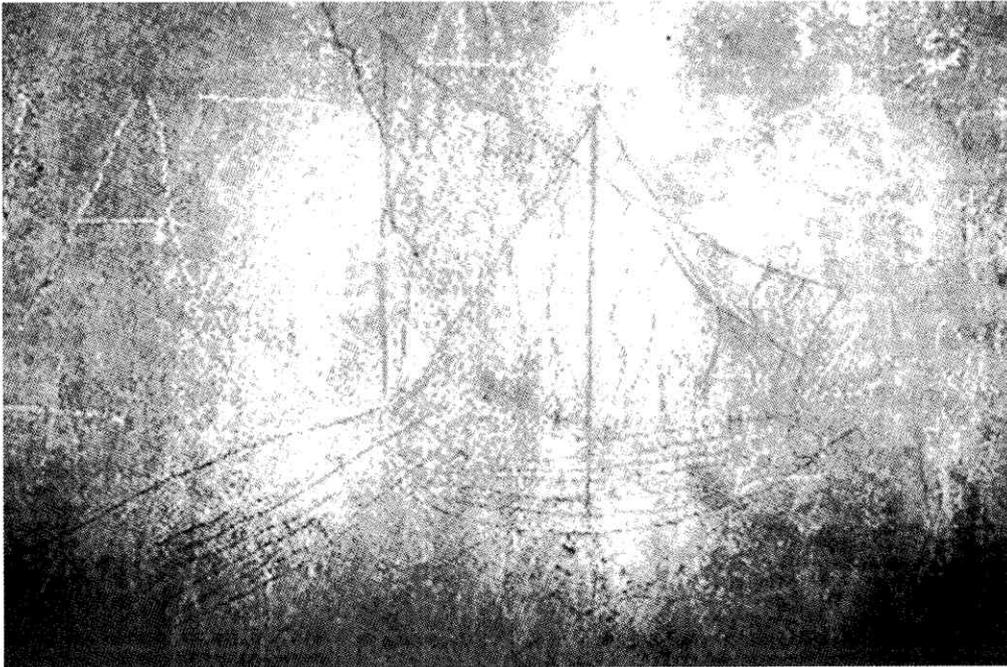


4. 第Ⅱ教会 祭室とクリュプタ

巡礼女エゲリアの闇



5. 祭室正面



6. 聖人のいる舟のグラフィッテイ
(赤チョークで刻線をハイライト)



図7. ヴェルギリウス・ロマヌス写本挿絵
(400年頃)



図8. (図6部分) マストの傍らに立つ聖人

巡礼女エゲリアの間

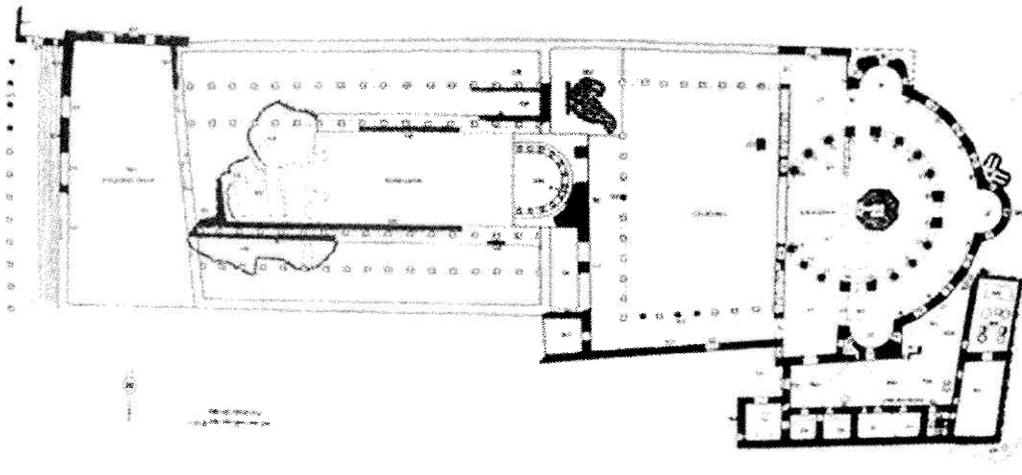


図9. イェルサレム、聖墳墓教会 バシリカとアナスタシス



図10. 現ヴァティカン美術館蔵
木製小箱蓋裏装飾（部分）

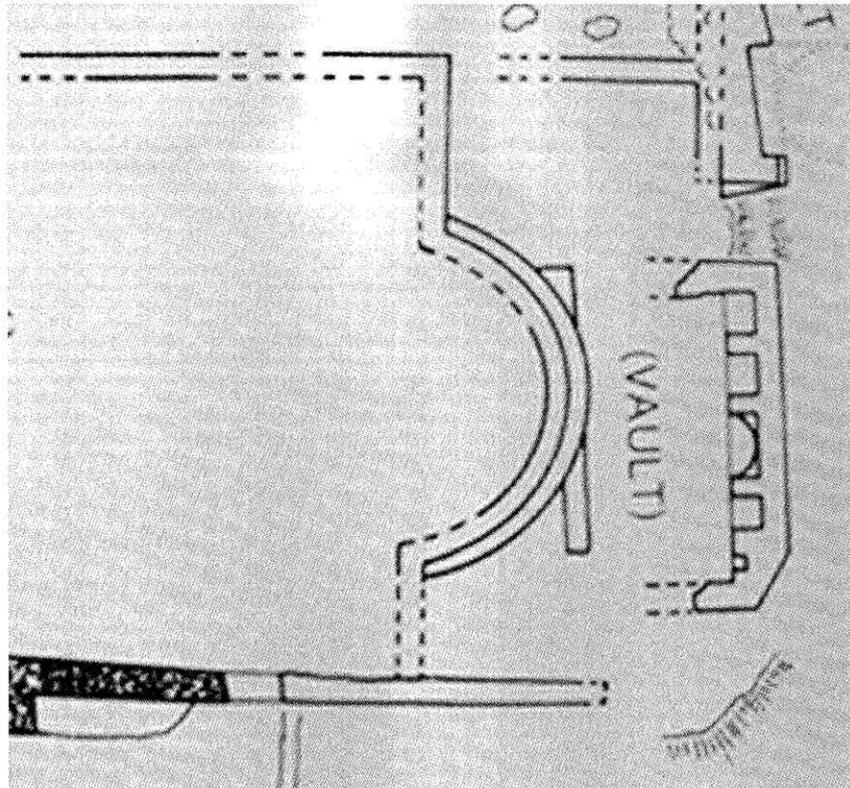


図11. 第Ⅲ教会 祭室とクリュプタ



図12. 同上 クリュプタ内部

巡礼女エゲリアの闇

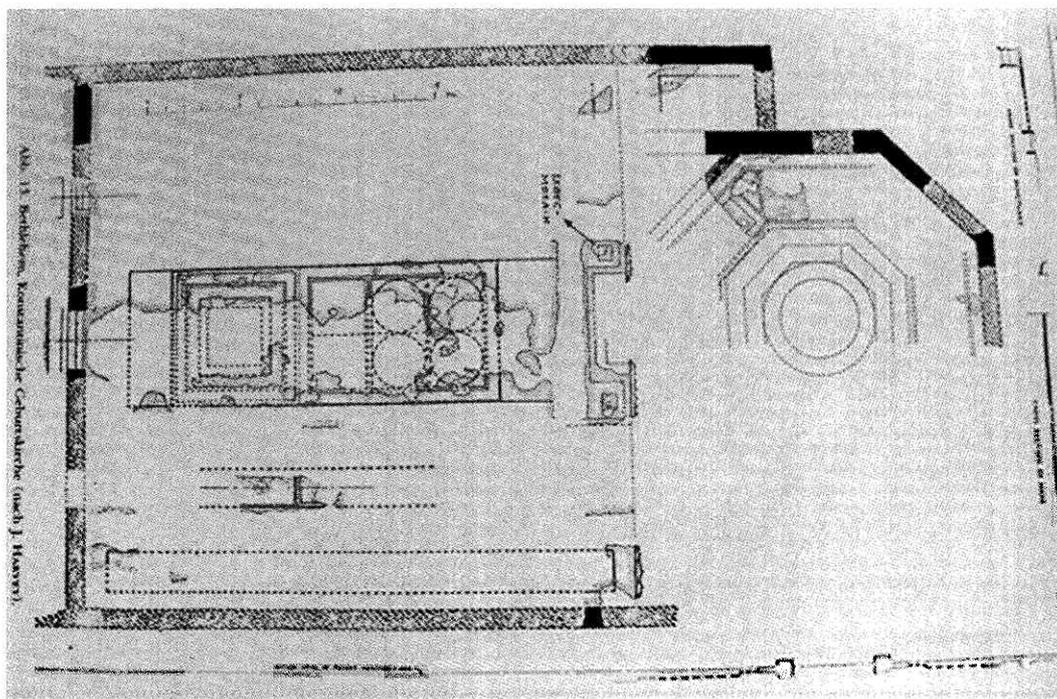


図13. ベツレヘム 聖降誕教会（創建時）

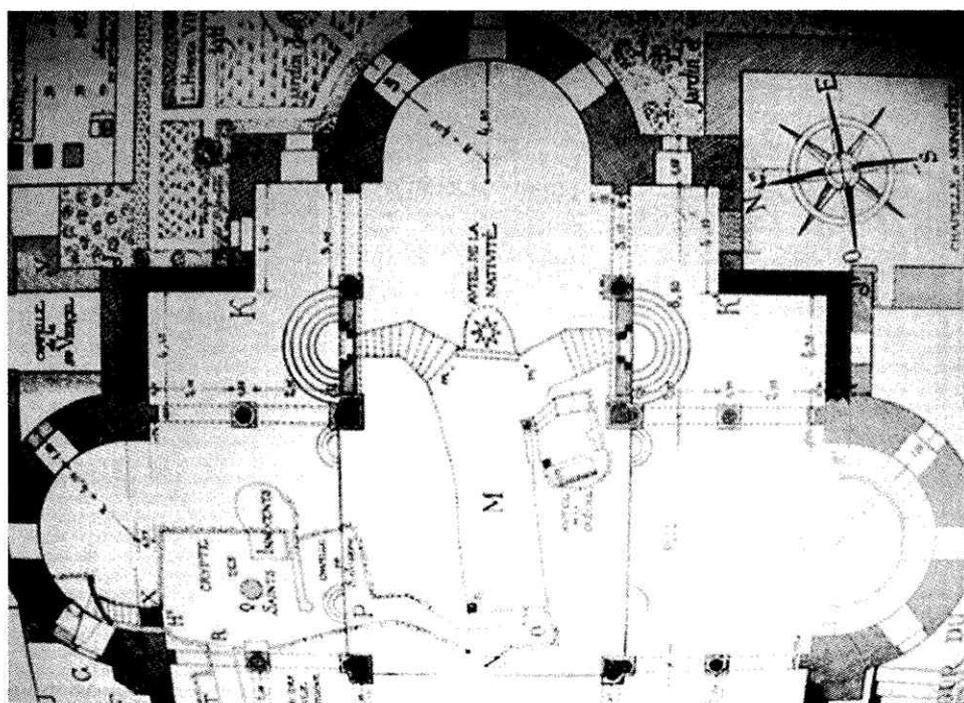


図14. ベツレヘム 聖降誕教会クリュプタ



図15. コプト語写本挿絵
Paris, Bibl, Nat., ms. copte 13